

平成 30 年 5 月 26 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04516

研究課題名(和文)ホリスティックな視点に立つ道德教育の研究

研究課題名(英文)Research of the moral education from a holistic viewpoint

研究代表者

下田 好行 (SHIMODA, Yoshiyuki)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：70196559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： 道德教育では、徳目の注入ではなく、主体的に判断し行動する意志が重要である。そのためには自己の内面の象徴に気づく教育方法が必要となる。シュタイナー教育では、メルヘンの語り聞かせを推奨している。メルヘンは、人間を超感覚的世界に誘い、人間の根源的な象徴に触れさせてくれる。このことによって人間は、自己の存在の本質を自覚し、自己の霊性を高めることができる。知識という物質で人間を動かすのではなく、自己の意志という象徴に触れることによって、人間は次のステージに上ることができるのである。自己の内面という分断化できない全体に触れるという「ホリスティック」な視点が、人間の精神性の向上には必要である。

研究成果の概要(英文)： It is not good to instill a virtue. It is important that a child can judge actively. And it becomes important that a child listens to the voice of his heart. In the Steiner education, it is recommend telling the fairy tale. The fairy tale invites man to the transcend real world. Then, man meets his essence. Thus, man improves his spirituality. The moral education from a holistic viewpoint is required of such a reason.

研究分野：教育方法学、道德教育、カリキュラム・マネジメント

キーワード： 道德教育 垣内松三
ホリスティック 青木照明
シュタイナー
メルヘン
自己の内面の象徴
リチャード・ローティ

1. 研究開始当初の背景

日本の道徳教育は、学習指導要領が示す徳目を教え込む授業がなされている。これでは子どもが主体的に判断し行動する意志が育成されない。これは人間の内面を部分的に物質的に捉えているためである。人間の内面という象徴は部分的・物質的ではなく、全体的に捉えなければならない。そこで「ホリスティック」という捉え方で道徳を見直すことにした。「ホリスティック」という言葉は、「部分にとられるのではなく全体的な視点で見る」ということである。こうした見方をすることによって、学校教育の「道徳」の新たな地平を開こうとした。新学習指導要領で構想されている「考え議論する道徳」は、分析的に、部分的にとられやすくなるのではないかと危惧される。そこで、部分にとられない全体的な視点に立った道徳の教育方法のあり方について追究しようと考えた。

2. 研究の目的

「道徳」を児童生徒が「自ら判断し行動化できる意志」と捉える。学習指導要領の徳目を知識と受け入れ、知識によって人間を律するのではなく、自己の内面にある善さや「こうありたい」とする意志に自ら気づき行動に移すことが「道徳」であると考え。こうした見方を行うためには、人間を見る見方を変えなければならない。分析的に部分的に人間を見るのではなく、全体的包括的に人間を見るのである。このように「ホリスティック」な立場に立ち、学校の道徳教育の方法を見直すことをこの研究の目的とした。

3. 研究の方法

道徳という人間の意識を知識という物質的な記号にとどめないで、記号の奥にある人間の象徴に照準を置くことにした。こうした教育を行っているのがシュタイナー教育で

ある。R.シュタイナー(Rudolf Steiner) は人智学に基礎を置き、霊的な進化が人間の生きる目的だとしている。この研究では、シュタイナー教育の「自己の自覚の関係性への気づき」について、その教育方法のあり方を追究した。特に、シュタイナーが人間の内面の倫理性を培う方法として重視した「メルヘン」に焦点を絞り、人間の意志と象徴に「メルヘン」がどのように作用するかを明らかにした。次に、人間の内面にある象徴にアプローチする方法にどのようなものがあるかを明らかにした。青木照明が垣内松三の自証体系(文学の読みの方法論)を参考に「瞑想読み」を開発した。この方法論によって児童生徒の内面が自己の象徴に近づく有様が明らかになった。さらに、人間の内面の象徴に届く方法としてどのような方法が他にあるかを探求した。

4. 研究成果

(1)シュタイナーの道徳教育の特徴

シュタイナーの倫理観を育成する教育は、「道徳の時間」を設けず、エポック授業や専科の学習や活動を通して道徳性を育むものである。徳目の注入という「部分」にこだわらず、学校の教育活動全体で人間の自律と意志の形成を考えるものである。これがシュタイナー教育の道徳となる。シュタイナーの道徳教育の特徴は、七年を周期とした発達段階に即しながら、「感謝 愛情 義務」の三つの基本的な徳を育てていくことにある。この三つの基本的な徳の根底には「行為に対する普遍的な人間愛」がある。それは今あることを「感謝」する意識が人間の欲望からくるエゴイズムを抑えるからである。また、普遍的な道徳を想定せず、道徳性は人それぞれによって違う「倫理的個体主義」も強調している。

次に、シュタイナーの道徳教育の根源的発想をシュタイナーの哲学から考察した。行為に愛を感じるという意識は、どのような認識

のメカニズムから生まれるのだろうか。シュタイナーは、「観察 知覚内容 直観・概念 道徳的想像・表象 思考 経験」という認識のあり方を唱えた。この認識のあり方にそって、シュタイナーは「道徳的想像力」を想定した。「道徳的想像力」とは「直観」で人間の内面の奥にある「表象」を捉えるものである。シュタイナーの倫理観の育成の根底には、この「道徳的想像力」が介在している。ゆえにシュタイナー教育では、直観に働きかける教育を重視する。シュタイナー学校では、メルヘンの「語り聞かせ」「詩の朗唱」を通して、自己の「表象」を「直観」で捉える授業を行っている。

(2)内面の象徴を直観で捉えるアプローチ

シュタイナー学校の道徳的側面の授業では、詩の朗読、語り聞かせ、劇の上演、寓話と聖人伝説、聖書、オイリュトミーなどがある。この中で「メルヘンの語り聞かせ」はシュタイナー教育の特徴で、シュタイナー幼稚園から行われている。主にグリム童話(メルヘン)を使い、教師は淡々と語り聞かせを行う。絵本を使用し読み聞かせを行うと絵本の制作者の意図が直接子どもの内面に突き刺さる。ゆえに、道徳的想像力を重視するシュタイナー学校では、語り聞かせが採用されているのである。メルヘンに関しては、ユング派は「普遍的無意識の元型」がメルヘンに投影されていると考える。シュタイナー派は「宇宙の古い霊的な神秘の表現」が投影されていると考える。シュタイナーはもともと人智学協会を主宰する宗教家であり、人間は物質ではなく霊的な存在と捉えている。人間は「体」「魂(心性)」「霊(精神)」で構成されており、自己の魂が進化・発展していくことが人間の生きる目的であるとしている。シュタイナーは、メルヘンにはこの現実社会から超感覚的世界へと魂が進化していく過程がよく表れていると言う。シュタイナーはこの超感覚的世界、言わば人間の内面の奥にある象徴を「道徳的想

像力」という「直観」で捉えようとしたのである。このことは、「緑の蛇と百合姫のメルヘン」の中でも実際に確認することができた。このメルヘンは若きシュタイナーが私淑したゲーテが創作したものである。

(3)自己の象徴を自証する文学の授業

自己の内面の奥にある象徴を「直観」で捉える授業を行っている人物が他にもある。茅ヶ崎市に在住の、元小学校長の青木照明である。青木は国語教育学者の垣内松三の「自証体系」という文学の読み方の方法を授業に応用し、「瞑想読み」という授業方法を開発した。青木は小学校の国語の文学の授業でこの方法を実践している。青木は茅ヶ崎の小学校で、国語の文学教材の単元をまるごと一つ受け持つ形で授業実践を行っている。垣内によると、人間は文字という記号の奥にある人間の象徴を「直観」で感じ取ることができると言う。そして、感じ取った「象徴」を自己の言葉で説明しようとする。これを垣内は「自証」と言う。このプロセスを経て自己は、鳥瞰的・全体的な視点で対象を読む(メタ思考)ことに発展していく。垣内はこれを「証自証」と呼んだ。垣内はこの「直観 自証 証自証」を文学の読みにおける「自証体系」と呼んだ。青木はこの理論を小学校の文学の読みの授業で実践し、「瞑想読み」という授業方法を創りあげたのである。その具体的な方法は、「初発の感想(直観)」「自分の読み深めたいことを書く(自証)」「対話により自分の読み深めたいことを深める(自証明)」「単元の終わりに論文テスト(感想)を書く(証自証)」と進んでいく。この一連のプロセスを経て、子どもは自己の読みを深めていくのである。対話における他者の意見も自己の読みを深める刺激となる。この刺激によって自己の読みがより明確になる。青木はこの「瞑想読み」を宮沢賢治の「やまなし」やその他の文学作品で実践している。この授業実践もシュタイナーのメルヘンの語り聞かせと同様に、自己

の内面にある象徴を「直観」で捉え、自己の内側にあるものを顕在化していくものである。国語教育の実践であるが、自己の内面にある響きを顕在化していくという意味で、倫理観の教育と考えることもできる。

(4) 「進歩の物語」から自己の象徴を重ねる

アメリカのプラグマティズムの哲学者であるリチャード・ローティ(Richard Rorty)は、「進歩の物語」という道德教育の方法を提唱している。アメリカの民主主義を創りあげた人物の物語を教材として使う方法である。例えば、奴隷解放のリンカーン、婦人参政権運動のアンソニー、労働運動のデブス、市民権運動のキング等の物語である。子どもはこの物語から民主主義を学んでいく。偉人の生きた軌跡を追うことを通して、偉人の感情と自己の内面の象徴を重ね合わせることができる。偉人の物語のどこに響いたのか。この問いを行うことによって、子どもの内面にある象徴を自分で自覚できるようになるのである。こうした自己の象徴を直観する教育方法は、人間の倫理観を形成していくと推察できる。

(5) 自己の内面にある善さを自覚する教育

自己の内面にある倫理観は外から与えられ植え付けられるものだろうか。それとも自己の内面にあるものが意識化され顕在化されていくことなのだろうか。この問いが道德を考える上で重要な問いになる。シュタイナー、垣内松三、青木照明の理論と教育実践は、後者の立場に立つものであると言える。人間を根底から動かすものは、自己の内面にある意志か、それとも外から与えられる知識によるのか、である。この二項対立は教育学の永遠の問いである。自己の内側にある象徴に言葉を与えるのがよいのか、それとも外から自己の象徴に働きかけ、その象徴に変化を与えるのがよいのか、という問題である。前者の場合、象徴と言葉(概念)は一つである。後者の場合は、象徴と言葉(概念)には距離がある。自己の内面の象徴をそのまま言語化す

る方法は、自己の象徴と概念が一体化している。そうした意味でこの方法はホリスティックであると言える。人間を動かすのは、自己の内側にある意志(象徴)なのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

下田好行「「個別化していく教育」におけるICTの役割 プレンディッド・ラーニングの導入の可能性に焦点をあてて」『東洋大学文学部紀要』第71集 教育学科編XL、pp.33-41。(査読無)

下田好行「特別活動と教育課程 「社会参画」「合意形成」「自己実現」の資質・能力の育成 -」赤坂雅裕・佐藤光友編著『やさしく学ぶ特別活動』ミネルヴァ書房、2018年3月、pp.66-79。(査読無)

下田好行「よりよき社会を創造する道德教育のあり方 「考え議論する道德」の向こう側にあるもの」研究紀要 No.47『主体的・対話的で深い学び』の学習指導の改善と充実』日本教材研究文化財団、2018年3月、pp.89-98。(査読無)

下田好行「「対話的・主体的で深い学び」はいかにして可能かー「対話」で読み深める学習指導法をてがかりにー」教育方法研究会『教育方法学研究』第18集、2017年8月、pp.21-35。(査読無)

下田好行「シュタイナーの人間観・世界観と道德教育 「メルヘン」のホリスティックな解釈を通してー」『東洋大学文学部紀要』第70集教育学科編XL』2017年3月、pp.23-32。(査読無)

下田好行「教師の情報モラルと人権感覚の意識 「学校ホームページ」と「学級通信」の調査を通してー」日本倫理道德教育学会『倫理道德教育研究』特別号、2016.10、pp.64-74。(査読有)

下田好行「R.シュタイナーの道德教育の特質 「道德的想像力」とメルヘンとの関係を中心にー」『東洋大学文学部紀要』第 69 集、教育学科編 XLI、2015 年度、PP.71-79.
(査読無)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

下田好行 (SHIMODA, Yoshiyuki)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号 : 70196559

(2)連携研究者

吉田武男 (YOSHIDA, Takeo)

筑波大学・人間総合科学研究科・教授

研究者番号 : 40247945